

# 文化財ニュース

No.44

発行 加古川市教育委員会 加古川市加古川町北在家23-1  
 編集 生涯学習推進室 電話 21-2000 (代表)  
 27-9349 (直通)

## 加古川市の新指定文化財

加古川市の指定文化財に甲冑2件と神輿(みこし)、絵画、無形文化財の5件が新たに選ばれました。特に平之荘神社の神輿は、八角形の高御座形式で、年代のわかるものとしては全国でも2番目に古いものです。

### 平之荘神社神輿

平之荘町山角・平之荘神社  
 平之荘神社は、鎌倉から室町時代に播磨国守護である赤松氏の庇護を受けた神社として著名で、その栄華をしのぶことができるのが、この高御座形式の神輿です。

神輿は、黒漆塗の八角形の継壇の上に、さらに八角形の屋形を据えています。屋形上部中央には鳳凰を置き、八隅の屋根の先端は内側に巻く蕨手になっています。蕨手の上には、小鳥(燕)を配しており、屋形の八角面には金銅製板飾りを張りつけています。神輿から棟札が発見されて

おり応安3年(1370)の墨書があります。県下では神戸市・長田神社の康正3年(1457)の重要文化財の神輿がありますが、それを約90年さかのぼる県下最古の神輿です。また高御座形式の神輿としては、高知県・楢本神社の弘長3年(1263)に次いで2番目の古さです。

### 縹糸胸取金茶威二枚胴童具足

平岡町西谷・岡田正己  
 江戸時代中期に製作された元服用の童具足です。胴は小札という鉄板を縹色(薄い藍色)や金茶色の威糸で綴じあ

わせています。兜には鍬形や金箔押龍などの前立物を取り付けています。また各所に脇坂家の家紋を据えています。

元服のためだけに製作される甲冑は、大変ぜいたく品であり現存するものはごくわずかしか

神輿は中世における平之荘神社の歴史の一端を物語るとともに、金工・漆工の工芸技術が見られる貴重な優品です。

なく、製作技術は入念精緻で美術品としても貴重です。

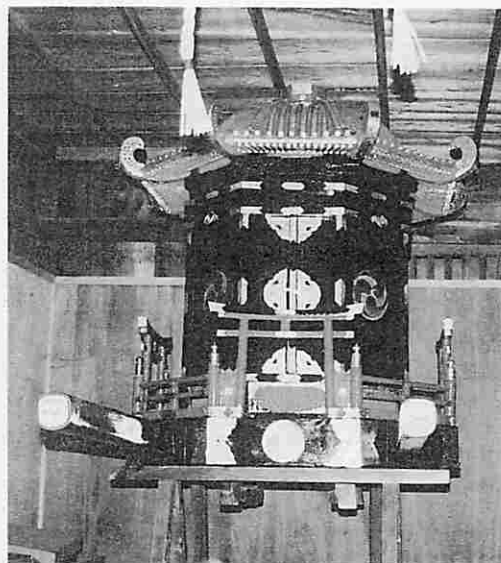
### 鉄錆色漆塗桶側胴具足

加古川町北在家・墨谷昇三  
 兜は室町時代後期から戦国時代に流行した日根野頭形兜です。胴は横板を革で綴じた桶側胴です。桶側胴は室町時代末期ごろに現れ、当時流行した当世具足に多く見られる形式の一つです。

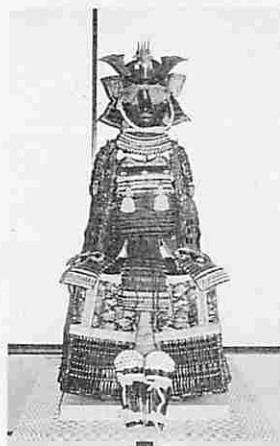
この具足は代々墨谷家の伝来品であり、また墨谷家は俳人・巴山とも浅からぬ間にあります。この歴史的経緯と実用の品としての機能美が見られる興味深い具足です。

次ページへつづく⇒

平之荘神社の神輿など5件



平之荘神社神輿



縹糸胸取金茶威二枚胴童具足



鉄錆色漆塗桶側胴具足

(1ページのつづき)

鶴林寺鬼追い



### 鶴林寺鬼追い

尾上町安田・鶴林寺鬼追い保存会

鶴林寺の鬼追いは、国土安穏や五穀豊穰などを祈る行事で、毎年1月8日に実施されています。室町時代から江戸時代初期の会式次第が残っており、それに基づいて行われている点が重要です。

災いに見立てた鬼が登場して堂内を周回しますが、やがて追い払

われて平和な年がくることを暗示します。鬼役は尾上町安田村から選ばれています。

他にも報恩寺(平荘町山角)や日光山常楽寺(上荘町井ノ口)などで鬼追いが演じられていますが基本的には鶴林寺の形式が影響を及ぼしていると考えられます。

10幅のうち龍樹画像



### 天台十大師図 (10幅)

加古川町北在家・鶴林寺  
天台十大師図は、天台宗の先達高僧の画像です。この画像には、インド、中国の僧や、最澄・空海・円仁・円珍が描かれています。空海が画像に入るのには鶴林寺が一時、真言宗となっていたことと関係があると思われます。

人物は細い線で力強く描かれ、それぞれの伝記を踏まえた人となりを写實的に表現しています。

また、宝徳4年(1452)制作の墨書銘文があり、制作年代の分かる人物画像として貴重な作品です。

### 溝之口遺跡の発掘調査

溝之口遺跡は加古川町溝之口から美乃利にかけて所在する弥生時代～平安時代の集落跡として知られています。今回の調査は分譲住宅建設にともなうもので、平成13年1月23日から2月15日まで実施しました。

主な成果は掘立柱建物跡1棟と溝、柵列跡などです。掘立柱建物とは柱を立てる際に、礎石などを使用せず直接地面に穴を掘って立てる建物のことです。

発見された掘立柱建物跡は3間×2間(約5.2m×3.4m)の規模で、小型の建物です。

柱穴は他にも発見されていて、この場所が奈良時代に居住域として利用されていたことがわかりました。このことは昭和62年度にお



ける隣接地の調査で、奈良時代の掘立柱建物跡が発見された状況とも符合します。また平成10年度の調査で、今回調査した水田の斜め向かいの調査地区から、奈良時代の土器を多く含む大溝が発見されたことともよく符合しています。これらのことから、居住区に隣接して大溝が流れており、その場所に割れた土器などが捨てられたと考えられます。



# 掘立柱建物跡4棟など発見

石守廃寺は、8世紀前葉から9世紀ごろの寺院跡です。1983、84年に実施した調査で塔跡、金堂跡などが発見され、西に塔、東に金堂を配する法隆寺式の伽藍配置となることが分かりました。遺跡の範囲は現在では大半が水田となっています。

今回の調査はほ場整備事業にともなう事前の範囲確認調査として行いました。その結果、掘立柱建物跡4棟とお寺の境界となる溝、渡り廊のような遺構を発見しました。

一番大きな建物跡1は9間×3間(約18㍍×5㍍)の規模です。ただし、調査区外にまだ建物が延びていく可能性があります。この建物の北側に隣接して3間×2間(約7.5㍍×3.7㍍)の建物跡2が並行して建てられていました。この建物も東側は地面が削られていたため、全体の規模を



## 石守廃寺発掘調査

つかむことはできませんでしたが、建物跡1との関係から東側にさらに延びる可能性がありますと思われる。

さらにその北側には、5間×2間(約10㍍×5㍍)の規模をもつ建物跡3が建てられていました。建物跡周辺には他にも柱穴が分布し、建て替えが行われたと考えられます。これらの建物は僧坊、食堂、雑舎など寺院に付属する施設と考えられます。また、建物跡1の20㍍東側には5間×3間(約8.4㍍×4.6㍍)の規模をもつ建物跡4が発見されました。

また、この建物跡4と建物跡1の間には、幅約2.6㍍の平坦部の両側に幅約1.3㍍の側溝を掘った道のような遺構が発見されました。はっきりと断定はできませんが、これは

建物から建物へ移動する際の通路として使用されたのかもしれない。

そのほかでは、寺院の境界を示す溝も東側と北側で発見されました。溝は2本並行して掘られ、溝の間に幅約2㍍ほどの平坦な部分がありました。これらは築地跡と考えられます。

寺院の範囲は大まかですが1町(約109㍍)四方程度を指向していたと考えられます。

奈良時代の地方豪族が建てた寺院跡において、計画的に配置された付属建物跡が発見されたことは類例の少ないことです。全体を調査しなければはっきりとは分かりませんが、興福寺・川原寺など奈良の大寺院に見られる三面僧坊を、大幅に簡略化した地方的な付属施設の配置があった可能性もあり得るもので、貴重な発見といえるでしょう。



加古川市内には数多くの文化財があります。

私たちの祖先の文化遺産が、社会開発と生活様式の変化に伴い、消滅の危機にさらされています。

保護協会は、これらの文化財(有形・無形・民俗文化財・記念物)ならびに自然風土を保護し、これらに関する研究とその知識の普及をはかり、市民文化の向上に資することを目的に、昭和51年11月13日に結成されました。そして、文化財見学会、

## 文化財に関心のある方!

加古川市  
文化財保護協会に  
加入しませんか

講演会の開催、文化財説明板の設置や文化財テレホンカードの発行などを通じて、文化財保護の活動を積極

的に展開しています。保護協会が加古川の文化財の再発見をしてみませんか。

会費 年間2000円

(中・高校生1000円)

◎文化財シリーズテレホンカード配布

◎文化財見学会・文化財講座の案内

保護協会入会のお問い合わせ

加古川市教育委員会

生涯学習推進室

☎27-9349



## 文化財紹介

### 加古川総合文化センター博物館

今回紹介する家形埴輪は、山手2丁目に所在する行者塚古墳の後円部北東造り出しから出土したものです。

行者塚古墳は全長約100mの前方後円墳で、発掘調査の成果から造り出しで行われた祭祀の様子があきらかとなりました。埴輪などの遺物から、5世紀初頭築造とされています。

北東造り出しでは5個体の家形埴輪と盾形・靱（矢を入れる筒）形埴輪各1、甲冑形埴輪2個体などが検出されておりほとんどが復元できました。

この家形埴輪は切妻造りの平屋建物で高さ67.7cm、最大幅105cmという大きなものです。棟にはひれ飾りがつけられており、外面に赤色顔料が塗られています。また、破風板の頂部に千木が、破風板を延長させる形で表現されています。先端は斜めにつくられ、内側の角は弧を描くように切り欠いており、千木が交差する部分を栓で貫いて留めている表現もあり忠実に再現されています。

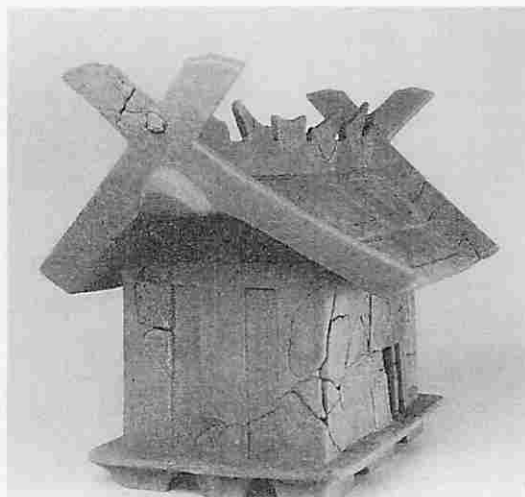
千木が表現された家形埴輪は、これまで6世紀初頭のものが最も古いものでしたが、それを1世紀近くもさかのぼらせる例となります。また、先端が斜めに造形されている点は現在の神社建築におけ

# 千木を持つ家形埴輪

る千木とも通じる点を持っています。

北東造り出しから出土した5個体の家形埴輪はすべて屋根の形が異なっていますが、このうち千木がつけられているのはこの埴輪だけでした。また、ひれ飾りがつけられているのもこれと入母屋造り家形埴輪のみです。北東造り出しから出土した家形埴輪の中では最大で、家形埴輪群の中心となる埴輪であったと考えられます。そのため、この家形埴輪は古墳に葬られた首長にとって、最も重要な建物を表現したものと思われます。

この埴輪は加古川総合文化センター博物館で展示されています。これ以外にも行者塚古墳の墳丘模型や多くの遺物が展示されていますので、ご覧ください。



▲西条廃寺（県指定史跡）



▲鶴林寺本堂（国宝）

## 文化財シリーズ・テレホンカード



▲阿弥陀三尊来迎図（神吉常楽寺）



▲三十六歌仙図絵馬 紀貫之（泊神社）



▲神吉八幡神社祭礼絵巻



▲絹本着色聖徳太子像（鶴林寺）

各700円

購入ご希望の方は『教育委員会生涯学習推進室』（新館8階）へ